

『和讃のころろ ～真宗の利益～』

南無阿弥陀仏をとなうれば 十方無量の諸仏は
百重千重囲繞して よろこびまもりたもうなり

『浄土和讃』現世利益和讃第十五首目

今日も非常に暑くなりまして、天気予報を見ますと今日は35度、明日は36度、明後日は37度と予想が出ております。そんな中で先日も高田派の名古屋別院の定例法話会にお邪魔させて頂きました。この定例法話会、いろいろな先生がその月毎に来て下さるのですが、7月はここ十数年私が担当させて頂いております。どうして私が7月担当なのかと申しますと「7月は暑い、それも梅雨明け早々で皆さんの体がついていかない、暑いものだからお参りが少ない、お参りが少ないのに遠くから先生にきてもらうには申し訳ない、だから自前の布教使で七月だけは済まそう。」と私がお世話になっておるわけです。それでも暑い中来て下さる方もいらっしゃいますので有難く思っております。今日もこの暑い中、ご聴聞下さり有難うございます。また一生懸命お話しさせて頂きますので、しばらく汗を拭きながらお付き合い頂けたらと思います。

この7月ですが、私のおりますお寺では地元に住んでいない方や少し離れて住んでいる方のお盆参りにお邪魔させて頂きます。いろいろな方がおられまして、新屋で外に出られた方、お葬式に出されてからお付き合いするようになった方、中には新屋を建てられると同時に仏壇を入れられて、葬式をしてなくても仏壇がある方が何件かあるんです。そういった方から「せっかくお仏壇があるのだから、お参りに来てもらえないのはなんとなく寂しいから、年に数回でいいから来てもらえないか」ということを仰って頂いて、7月のお盆参りということでお邪魔させて頂くわけです。それとは別に、八月は地元に見える方のお盆参りということでお邪魔させて頂くんですね。あるお宅に伺いますと、こんなことを言われました。

「お寺さん、一つ質問してもいいですか？」

「はい。」

「8月のことはウラボンと言うんですね？じゃあ7月のお盆はオモテボンと言っていいのですか？」

私、ズッコケそうになりました。なんでズッコケそうになったかということで、お盆のことをお話しさせて頂きたいと思います。今日のサブテーマは「真宗のご利益」ですが、まずお盆のことを進めていきたいと思います。

『真宗のしきたり』というパンフレットに上手に書かれていたので、そのままコピーさせて頂きました。「お盆の由来とは、どのようなものでしょうか？」との質問です。「お盆の正式な呼称は盂蘭盆会。梵語のウランバナの音写であります。ですから表とか裏とかいうことではないのですね。東の方では7月にお盆をやることが多く、西の方は8月が多い。全体的に8月が多いというだけで、実は決まり事ではないんです。

「倒懸」(逆さまに吊るされる苦しみ)と意識され、『仏説盂蘭盆経』という経典がもとになっています。お釈迦様の弟子の目連さまが、餓鬼道で苦しむ母を救おうとお釈迦様の教えに従って、僧侶の修行機関の最終日、すなわち7月15日に仏弟子たちを招いてもてなしの供養をしたことで母が救われた、という物語に由来しているのがお盆の行事であります。また仏弟子たちがもてなしの供養を受けて、母が救われて喜びの踊りをしているのが盆踊りの始まりであると言われております。

どういうわけかわかりませんが、お盆の時期には「現世利益和讃」を読ませて頂くことが非常に多いと聞いてお

ります。私のお寺でも、この「現世利益和讃」の最後の五首を読ませてもらいます。そして、お盆の夜三日間は
お寺の本堂では歓喜会を勤めさせて頂くのですが、十五首全部ご同行と一緒に読むことにしております。

「現世利益和讃」を通して、今日は真宗の利益ということを考えてみたいと思います。いかがでしょうか、みな
さん。これ一般的にはリエキと読みますよね。「リエキ」と読む場合と、「リヤク」と読む場合ではちょっと意味
が違う。リエキという場合は、経済的に利得があった時によく使います。「リヤク」という場合は、神仏の力に
よって授かる幸せのことを「ゴリヤク」と読みます。真宗の場合の「ゴリヤク」といいますと、他の宗旨とは全
く考え方が違う点があるんです。それを考えてみたいのですが、一般的に現世の利益といいますがみなさんはど
んなことを望まれるのでしょうか？ここに昔の俗歌を掲載させて頂きました。これが上手にできている。紹介させ
て頂きますね。

「いつも三月花のころ おまえ十八わしゃ二十 死なぬ子三人みな孝行

つかってへらぬ金百両 死んでも命があるように」

素晴らしい見事な人間の欲望がまとめられた歌ですね。「いつも三月花のころ」は季節、「おまえ十八わしゃ二十」
は年齢、「死なぬ子三人みな孝行」は家族、「つかってへらぬ金百両」は財産、「死んでも命があるように」は寿
命。この季節年齢家族財産寿命とは私たちの欲望の根本、日々の生活の中において、人生を歩いていく中でこう
なりたい、ああなりたいというのはこのことが圧倒的に多いのではないのでしょうか。今日一日のことを思い出し
てください。「今日は暑いなあ、こんなに暑くてはたまらんなあ、はやく涼しくならんかなあ。」と季節のこと。
「若い頃には全然苦にならんかったのに、年取ると堪えるわ」と年齢。「誰かお寺まで車で送って行ってくれん
かなあ。みんなうちにおるならそのくらいやってくれたらいいのに。」と思ってもなかなか孝行してくれないと
いう家族。「じゃしょうがない、タクシーでいくか。と思うが、タクシーも結構お金がかかって高いからなあ」
と財産。「そんな文句ばかり言うけれど、このいのちも少しでも長生きしたい」というのが、寿命であります。
日々毎日のことを思い出してもこのことに思い当たることがいっぱいあります。

そのことを見事に歌い上げたのが、「いつも三月花のころ お前十八わしゃ二十 死なぬ子三人みな孝行、つか
ってへらぬ金百両、死んでも命があるように」。これは実生活の欲望の代表といってもいいかと思えます。現世
の利益とは、一般的にどうでしょうか。その欲望が叶えられることを現世の利益と一般的に言ってしまう
のではないのでしょうか。だから観光寺のようなところに行っても、お札のようなものを受けて見える。あるお宅
のお参りに行かせてもらいますと、仏壇にああいったお札だらけ。「たくさんありますね」と皮肉交じりに言っ
てみたつもりが、「私はものなんにも欲がございません。あちこちのお寺に参らせてもらうのだけが楽しみなん
です。」と仰る。こういった言葉を聞くと家族の方も「うちのおばあちゃんは信心深いですから」と言われるわ
けです。それ以上仏縁をきるような皮肉を言う必要もないですからそのままにしておくのですが。けれどもその
中に、ボケ防止、ぼっくり寺のものまでありました。話を切り出して「そうですか、物欲とかそういったものは
ないんですか？」とお聞きしますと「そうなんです。全然欲はないけれども、一つだけ。死ぬときはぼっくりい
きたい」と言われたんです。ぼっくりいきたいというのは、「家族の世話にもなりたくないし、人に迷惑かけて
見苦しいところを見せるのもいやだ」という欲の現れであって、そういったあちらこちらのお札を求めて参られ
るということは、信心深いということよりも自分の欲望があまりにも多いからその欲を叶えてもらうために参っ
ているように見えます。信心深いというよりも、かえって欲深い方だなあと見えてしまったわけですね。

先月、「神社という場所は願う場所、お寺という場所は願いに会う場所」ということをはっきり申し上げました。
浄土真宗の南无阿弥陀仏の道を歩む私たちにとって、この場所はこうで、あの場所はこう、といろんな道がある

のかと言ったらそうではない。私たち浄土真宗の同行、南无阿弥陀仏の道を歩む私たちにとっては南无阿弥陀仏の道しかない。ですから、「寺が願いに会う場所」というならば、私たちが浄土往生・本当の幸せになるためには阿弥陀如来様が「必ず救うぞ、間違いなく救うぞ」と全てのものを救うと願ってくださっている願いに会う場所がお寺であるのです。では神社どういう場所か、願う場所。この願う場所というのはご本願のことではなく、自分の実生活の欲望というものを願う場所である。神社のことに我々がアレコレいうことではありませんが、浄土真宗の同行にとっては南无阿弥陀仏しかないんだ、こういう立場でありますから、当然一般でいうような現世利益といったものの考え方をしないんです。だからこういう浄土高僧和讃善導釋があるんです。

「佛号むねと修すれども 現世をいのる行者をば これも雑修となづけてぞ 千中無一ときらはるる」

現代語訳を言いますと「南无阿弥陀仏ともっぱら称えても、現世の利益を祈る人は、これまた雑修と名づけて『千人の中に一人も往生する人はない』と嫌われる」とはっきり言われているのです。つまり、南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏と手を合わせておって「こうしてください、ああしてください」とそういうような形で願う、祈るということは雑修であって、こういった称え方をしたならば千人の中の一人も本当の幸せになる人はいないと嫌われるとはっきりご和讃のなかで言われているのです。では先ほど申しましたお盆に挙げる現世利益和讃はどういったことなのでしょう。浄土和讃の最後にありまして、全部で十五首からなっています。実際読んでいただくと「アレッ?!」と思うことが次から次へとでて参ります。

一首目を読んでみますと、

『阿弥陀如来来化して 息災延命のためにとて 「金光明」の「寿量品」 ときおきたまへるみのりなり』

現代語訳をしますと、阿弥陀如来は王舎城に出現され、災難を無くし命を延ばすために、金光明経の寿量品を説き残して下さってある。阿弥陀如来は現世利益を与える仏様と説き残して下さっています。つまり阿弥陀如来は災難をなくし、命を延ばすために金光明経の寿量品を説き残した。つまり阿弥陀如来は現世利益を与える如来さんである、といきなりこう書かれてある。

二首目

『山家の伝教大師は 国土人民をあはれみて 七難消滅の誦文には 南无阿弥陀仏をととなふべし』

山家とは比叡山のことです。伝教大師とは最澄のことでありまして、比叡山で天台宗を開かれた方です。七難とは、仏典によっていろんな解釈があるのですが、火事などの火難、水害などの水難、台風などの風難、人を叩いたりする刀杖難などの難を消滅させる誦文には、これは国土人民をあはれみて、嵯峨天皇から困難を留めるにはどうしたらいいのかと山家の伝教大師が聞かれたのです。どうしたらいいかと問われて、七難消滅の誦文には南无阿弥陀仏ととなふべし、とここで伝えられているのです。そのことを親鸞聖人がわざわざここで紹介されている。

三首目

『一切の功德にすぐれたる 南无阿弥陀仏をととなふれば 三世の重障みなながら かならず転じて軽微なり』

三世の重障とは、はなれがたき重い煩惱の鎖から解き放たれて、必ず転じて軽微なり、つまり煩惱の報いが必ず転じて軽くなるということですね。

四首目

『南无阿弥陀仏をととなふれば この世の利益きはもなし 流転輪廻のつみきえて 定業中天のぞこりぬ』

定業とは、さだまっている寿命、中業というのは途中で死ぬ、定まっている命とか途中で死ぬということなく、のぞこりぬでありますから、寿命を延ばして下さるのである、と仰っておられる。

五首目

『南无阿弥陀仏をととなふれば 難陀・跋難大竜等 無量の竜神尊敬し よるひるつねにまもるなり』

六首目

『南无阿弥陀仏をとらふれば 炎魔法王尊敬す 五道の冥官みなともに よるひるつねにまもるなり』
みなさまは一番好きな和讃、一番かっこいい和讃とか考えたことありますか？かっこいいという言い方は幼い頃の考え方で、私は小学校中学校くらいまで、私が一番かっこいい和讃といえばこの六首目でありました。この和讃をお盆に読む度に「ああ、この和讃かっこいいなあ」と思っておりました。何でかと言いますと、単純なことで炎魔さまが出てきて、炎魔さんが尊敬して、地獄の配下までもが一緒になって南无阿弥陀仏の人を尊敬して、よるひるつねにまもるなり、とされている。ですからこの和讃はかっこいいなあと思いながら、非常に耳に残った和讃でありました。

十五首のキーワードとなることを申し上げますと、十五首の中の十首に「南无阿弥陀仏をとらふれば」と書かれています。「まもる」という言葉が、十五首中九首、よるひるつねにまもるという言葉が十五首中五首あります。ですから非常に多いのでキーワードになると思うんです。南无阿弥陀仏をとらふれば、よるひるつねにまもって下さる、このことを伝えて下さっているのではないかと思います。これですね、よくよく考えてみますと非常に首をかしげるんですね。浄土真宗は現世利益のことは言わない。といいながら表面上だけみると息災延命という災難をなくして命を延ばすということでありまして、七難消滅は災難を消滅させる誦文として南无阿弥陀仏としてあげているというのは、まさに自分の都合・自分の欲望をかなえる一つの言葉として南无阿弥陀仏をとらうればと聞こえてくるんです。

どうしてこのような伝え方をして下ったのかということは、実は親鸞聖人の時代背景というのが非常に大きく関係してくるのだと思います。

親鸞聖人の時代背景をざっと見てみますと、(資料から)

≪親鸞聖人(1173~1262)が生まれ、生きた時代は乱世であった。親鸞聖人の生まれる十七年前の保元元年、皇位継承をめぐる崇徳上皇と後白河天皇が対立した。摂関家の藤原頼長と忠通の家督争いがこれに結びついて、保元の乱が勃発した。上皇と頼長側に源為義・平忠正、後白河天皇側に源頼朝・平清盛らの武士が従い争ったが、上皇側が敗れた。三年後、平治の乱が起こる。上皇の近臣たちの暗闘が源平の武士団の対立に結びつき、上皇の幽閉、藤原道憲殺害という事件に発展。しかし平清盛の策略によって上皇は脱出し、激しい戦いのすえ源氏方が敗北。この後、清盛は太政大臣にのぼりつめ、平家一門は栄華を極めるが、源平の遺恨はいよいよ深まる。親鸞聖人九歳の年、清盛が没すると源氏の逆襲が始まった。四年後、壇ノ浦で平氏は滅亡し、源頼朝が征夷大将軍になるが、親鸞聖人の青少年時代はクーデターやテロの横行する紛争の時代であった。入り乱れての勢力争いによって都は何度も戦場になり、戦火に焼かれた。治安は乱れ、人心は荒廃した。さらに台風や大地震に襲われ、治承元年、親鸞聖人五歳のときには、京都に大火が起こり、都の三分の一が焼失した。また二年続いた養和の飢饉では京都だけで犠牲者が四万人を超えたという。京都の道路には悪臭が満ちた。死は生と隣り合い、人々は世の終わりかと恐れおののくほかなかった。≫

(餓鬼草紙を見て頂きながら)大火や飢饉などが起こり、人々は不安におののいていました。「方丈記」にも、当時の悲惨な様子が記されている。鎌倉新仏教の起こる必然性はあった。飢饉だけで京都で四万人が亡くなった、これは今の4万人と意味が違うんです。鎌倉幕府が開かれた頃では、684万人が全国の人口でありました。今現在は1億1522万人くらいです。親鸞聖人の時代の京都人口は、15万人ほど。ですが飢饉があった頃には10万人程、さらに50年経ちますと7万人、さらに50年経ちますと4万人となってしまいます。まさに地獄の様相だったと思います。老人から若い人、子供まですべての人が死と隣り合わせだったんです。栄養失調であれば骨がでて、おなかだけぷくっと膨れてしまう。地獄の餓鬼のような姿になってしまっている。そういった中で、若い人が亡くなる率が非常に高かったように感じます。

日本人の平均寿命、縄文~弥生時代はビックリしたんですが14.6歳。15歳までいってないんですね。室町時代

ではやっと 15.2 歳になって、江戸中期になってやっと 20 歳を超えます。江戸時代は安定していたのでここでぐんと平均寿命が延びていくのですが、それでも男が 45.5 歳、女が 40.6 歳だそうです。50 歳を超えないんです。やっと 50 歳を超えたのが、昭和 23 年です。ここでやっと男女とも 50 歳を超えたんです。それから最近までのすごい伸び率であります。WHO が世界の平均寿命を発表しており、平成 22 年の日本では男が 79 歳、これは世界 4 位。女が 86 歳、これは世界一位なんです。男女の平均が 83 歳、これも世界一位。こういう結果が出ているんです。何が言いたいかと言いますと、縄文から江戸というよりも、昭和の前半まで男女とも人生わずか 50 年と信長が歌っておりましたが、実際は 50 歳までいっていない状態でした。ある学者さんが仰っておったのが、どう頑張っても人間の体は 130 歳までだそうです。しかしですね、この時代に年配の方がいなかったか、といいますとそうではない。平均年齢がこのようになったということは、若い人が圧倒的に亡くなっているということになるんです。

お参りであるお宅の過去帳がありましたので「ちょっと見させてください」と見させて頂きました。なかなかのお宅で江戸時代から続く家柄でたくさんの法名が書かれていたんです。見ている内に、その法名を見てびっくりしました。何でかと言いますと、ものすごく位号が多かった。位号とは、男性は居士、信士、童子、孩子とあります。女性の場合は、大姉、信女、童女、孩女。死産や流産のことを水子といいます。よく勘違いされて居士や大姉が偉くてということではなくて法名を読むときの尊称でありまして、上とか下とかは関係ない。こういった位号が使われる中で、びっくりしたのが童子、孩子、童女、孩女がものすごく多かったです。江戸時代に亡くなった方なんかははっきり言って 3 分の 2 くらいは童子・童女でありました。童子・童女はいわゆる幼い子供さん、孩子・孩女は乳飲み子であります。そういった子たちの法名が圧倒的に多いということで、平均寿命が短いというのはよくわかる。年配の人がおっても早く亡くなる人が余りにも多いものですからこういった結果になったのではないのでしょうか。

大火があって飢饉があって地震もあって一番弱い立場である童子童女の年代の子たちはひとたまりもなかったのではないのでしょうか。こういった苦しみ、そして悶え死ぬ人たちを親鸞聖人は目の当りにしていたのでしょうか。だから、そのお姿を見たときにそういう時代背景において、そういった子供さんや大人でも文字が読めず教えに遇うこともできない、そして陰陽師といわれるおかしな占い師が横行していた時代でもあります。本当に心の底から悩まされることも多かったのでしょう。そういう人たちにとにかく「大丈夫だよ、南无阿弥陀仏を称えなさい、南无阿弥陀仏を称えたならば本当の幸せになる、南无阿弥陀仏を称えることによって息災延命、七難消滅など直接起こるというわけではないが、南无阿弥陀仏を心を頂いて安心を得ることによってまわりにまわって結果的にこうなりますよ」と直接的にわかりやすく申されたのでしょう。現世利益和讃の左訓にヤワラゲホメとあります。つまり少しでもわかりやすく南无阿弥陀仏を讃えて下さる事によって、苦しみ抜く人々が少しでもこの幸せになる道に歩んで頂きたい、その道を選んで頂きたいというお気持ちの表れが現世利益和讃という直接的な表し方であると思うのです。それが嘘をついているということではなくて、まわりにまわって結局そういうことにつながっていきますよという意味があると思うんです。

(休憩)

他の動物と違って人間には特徴があります。他の動物には無い、誇るべき人間の特徴って何だと思いませんか？そうですね、感情ですね。私が申し上げようとしたのは、人間は願いをもっている。こういう言い方もできていると思います。しかし、動物だって願いを持っているかもしれないじゃないか？と言われるかもしれません。確かに願いを持っているかもしれない。ただし、犬や猫の願いは直接本能的なものにつながる願いが多いと思います。例えば、おなかがすいたから餌が欲しいとか、眠りたいから寝たいとか、そういった本能的な願いが多い。しかし、それは人間の願いとはちょっと違うと思います。人間ももちろん本能に結びつくような願いもありましょう。けれども、それよりももっともっと大きい願い、人生を通して大きな願いというものを人間は持っています。そ

れこそが、人間の誇るべき特徴であると言っていいと思います。

皆さんにお聞きします。みなさんの願いは何ですか？これは言うまでもなく、人間である以上みな共通であると思います。私達人間の大きな願い、もっと言うならば根本の願いとは何かというならば「幸せになる」ということであると言っていいと思います。そういった願いを私たちは持っているにも関わらず、もうどうしようもならない、どうしても死ぬしかないというような状況に追い込まれたらどうなりますか。

親鸞聖人の時代はそういった時代であったということでもあります。そういった時代でも、人々に向かって「南无阿弥陀仏と称うれば大丈夫なんだよ」と言って下さっているご和讃がこの『現世利益和讃』なのであります。十五首中最後の三首の意味を読ませて頂きます。

『南无阿弥陀仏をとふれば 観音勢至はもろともに 恒沙塵数の菩薩と かげのごとくに身にそへり』

初めの二句は「本願名号を称える真実信心の人には、観音菩薩や勢至菩薩は一緒になって」と訳すことが出来ます。みなさん、一光三尊仏ってありますよね。本寺のご本尊でありまして、このご本尊は善光寺から頂いてこられたものなんですね。中心が阿弥陀如来、向かって右側が観音菩薩、左側が勢至菩薩、といった形になっております。観音勢至とは本来阿弥陀さんの脇にもおありになるはずなんですが、普段は姿形をお隠しになって見えます。ですから、通常のお寺には観音勢至は飾られていないことが多いんです。しかし、古い形では観音勢至のお姿がおありになるこういった形があるんですね。阿弥陀如来のはたらきをお助けする菩薩として伝えられているのです。その観音勢至が一緒になって、恒沙塵数とも譬えられる無数の数えきれない菩薩方と、影が形に添うように身に随ってくださる。南无阿弥陀仏を称うれば、本当に陰になって見えないような形でも、常に私のすぐ近くにいて下さって私に寄り添ってくださる、と現代語訳ができます。そして、次の和讃は、

『無礙光仏のひかりには 無数の阿弥陀ましまして 化仏おのおのことごとく 真実信心をまもるなり』

信心を頂き、念仏申す身になると、如来の光明の中に住むこととなります。それは無礙光仏、障りのないひかりであります。こう名づけられる弥陀の光には、無数の阿弥陀の変身した仏がおいでになり、その変身した仏は、それぞれどれもこれも、如来回向の信心をお護り下さるのであります。信心そのものを護って下さるわけですね。そして最後の和讃は、

『南无阿弥陀仏をとふれば 十方無料の諸仏は 百重千重圍繞して よろこびまもりたまふなり』

信心を頂いて、南无阿弥陀仏を称える身となると、十方世界においでになる数限りない諸仏方が、百重にも千重にも囲みとりまいて、諸仏の本意も衆生に念仏を勧めることだと喜びお護り下さっているのである。どんな状況になっても常に仏さま方は一緒にいて下さる。そういったことをですね、本当にもう死ぬしかない立場の時に、「大丈夫だよ、仏様がみな護って下さっているんだよ」と、南无阿弥陀仏を称えたならば必ず見守って護って下さるということをこの現世利益和讃に説かれているのです。

この現世利益和讃の元となったのが、現生十種益（げんしょうじゅっしゅのやく）というんです。簡単に資料をもとに説明させて頂くと

念仏者は、現在生きているうちに十種の利益を受けることができるということ。『教行信証』の信巻に「金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を得。なにものか十とする。

- 一、冥衆護持の益（諸天前神が見守ってくれる）
- 二、至徳具足の益（最高の徳を成就する）
- 三、転悪成善の益（悪を転じて善になす）
- 四、諸仏護念の益（諸仏に護られる）
- 五、諸仏称讃の益（諸仏から称讃される）

- 六、心光常護の益（常に仏の光明に包まれる）
- 七、心多歡喜の益（心に歡喜の気持ちが多い）
- 八、知恩報徳の益（仏恩を感じ報謝する）
- 九、常行大悲の益（常に大慈悲の行を行う身になる）
- 十、入正定聚の益（必ず浄土に生じ覺りを開くことが決定する）

とあります。口先だけの念仏ではなく「金剛の真（信）心」を得た人の境地を言う。

このように説明がありまして、詳しい説明はまた改めて後日にしたいと思います。じゃ、現生十種の益と現世利益というのは同じなのかどうかということが問題になりますね。これは、厳密にいうならばちょっと違うわけです。現生十種の益とは、どちらかという精神的なものに対する利益といってもいい。それに対して現世利益ということは、これはまさに精神的なものというよりも私の身そのものの利益、私の身そのものに対する利益、この身の幸せ、たとえば息災延命やら七難消滅そういったことに伝わる言葉であります。ですから、現生十種の益と現世利益ということが同じというならば、まさに私そのものなのか精神的なものに訴えて下さっているのかどうかの若干違うわけです。しかし、現世利益和讃の元が、この現生十種の益これにあったことは間違いないと思います。

ですから現生十種の益の『教行信証』信巻にある考え方が『現世利益和讃』というものを親鸞聖人が誦って下さったことにつながってくるんじゃないかと思うんです。この身の幸せを伝えて下さっているのが『現世利益和讃』ということだと思いますので、これはまさに欲望を満たすということ伝えて下っているのではなくて、南无阿弥陀仏を称えることの喜びというものを伝えて下さっていると言っていると思います。

最近ですね、お念仏の声が聞こえないとよく言われます。どうですかね、昔はお寺の本堂に人が集まっておっても南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏とよく声が聞こえたと思います。今日は聞こえましたでしょうか。昔テレビを見とりますと、金さん銀さんはお仏壇の前で南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏とよく言っておられたように感じます。大正生まれの方くらいまではよく南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏と称えて下さったのです。しかし最近では正直言ひまして、なかなか南无阿弥陀仏の声が聞こえてこないんですね。「南无阿弥陀仏の声が聞こえない」という思いは確かにあるんですけども、「南无阿弥陀仏の声が聞こえない」というご意見もまた聞こえるのですがいかがでしょうか。本当に聞こえないのでしょうか。これは私は違うと思うんですね。聞こえないんじゃないで、念仏の声が私の口から出ていないだけだと思うんです。つまり私の口から出る念仏は私の耳に聞こえます。そうですね。自分が南无阿弥陀仏南无阿弥陀仏と称えればちゃんと自分に聞こえてくる。自らが称えていないのに、聞こえるはずがないじゃないですか。だから最近聞こえないのではなくて、自らが南无阿弥陀仏を我が口から称えていないということだと思うんです。そのことをですね、親鸞聖人の時代にこの和讃を作る際に、とにかく称えてみてくださいという気持ちが多分にあったんじゃないかと思うんです。

その念仏を称える身になることによって私たちの人生が、如来さまのご本願に遇わせて頂いて、どんな立場であろうとどんな苦難の中であろうとすべてお任せすることによって初めて救われる、浄土往生の道が開かれていく、ということが伝えられていくのです。（水木しげるさんの二河白道図を手元に）



大無量寿経下巻に『独生独死独去独来』＝ひとりうまれひとりしにひとりさりひとりくる」とあり、私たちの人間の本来の姿というのはこういったものであるとお教え下さっています

。つまり、一人であるということなのですね。どういうことか。一人一人の人生というのは、いくら仲が良くても、いくら夫婦でも、親子でも、別々の人生であります。わたし一人の人生、私の道しかないのです。その一人一人の道をそれぞれが歩いていく。その中でやはりひとりだと淋しいということになる、これが根本であると思います。そしてただ寂しいだけではなくて、にっちもさっちもいなくなる時がありますね。その中でちゃんと護って下さる方がおられるのです。といったことを教えて下さっているのが、この『二河白道図』であると思うんです。

「二河白道の喩え」というのを善導大師という方がお説き下さりました。つまり、私たち念仏者の歩むべき道をお説き下さったのです。

ごく簡単に説明しますと、荒野をひとりの旅人が旅をしている。その旅人に、盗賊・獣・毒蛇が次から次へと襲いかかる。旅人は意を決して西に向かって逃げます。西に向かって逃げますと、今度は旅人の行く手に荒れ狂う水の川、そして燃え盛る火の川が立ち塞がります。よく見ると真ん中に白い道があるのだけれども、その道は僅か 15cm ほどしかなくて、燃え盛る火と荒れ狂う水で渡れそうにない。進むも死、留まるも死、退くも死、三乗死というのですが、にっちもさっちもいかない状態になっている。そんな中で困り果てていると、東の岸から「この道を行け！」という声が聞こえる。その声に従って白い道、わずか 15cm ほどの道を渡り始めると今度は西の岸から「この道を来い！」という呼び声が聞こえます。この呼び声に従って歩み始めると、わずか 15cm ほどの道と置いていたけれども渡りだすと広い広い大道で安定した道であったんです。そしてその道を渡りきったところに本当の心の安らぎ・幸せがあったということを伝えて下さったわけです。

旅人は何を表すかと言いますと、私であります。盗賊・獣・毒蛇等は肉体の苦痛を表す。水の川は貪愛、貪欲と愛着の心。火の川は瞋憎、怒りの心です。そして、東の岸の声は、お釈迦様。釈尊の教えです。西の岸の「この道を来い！」という呼び声は阿弥陀如来。本願招喚の勅命＝呼び声であります。その辿る道は、南无阿弥陀仏であります。つまり私たちが歩むべき道は、南无阿弥陀仏の道しかないということを教えて下さったのが「二河白道の譬え」であって、その譬え話を絵にして下さったのが『二河白道図』、そしてこの絵が水木しげるさんなりの二河白道図なのであります。ビビビの鼠男が、きっと私たちなのでありましょう。

「汝、一心正念にしてただちにきたれ。我よく汝を護らん」こういった言葉として伝わっております。「汝一心正念にして」というのは、真実信心ということであります。真実信心をもってただちに來たれ、ということでもあります。我よく汝を護らん、必ず救う、という呼び声であります。まさに現生不退、現生正定聚と言っていると思います。そのことがこの絵に描かれている訳ですね。非常によくできていますね。

では、これは何を表して下さっているかと言いますと、まさに「安心（あんじん）」ということであると思います。安心とは、安らかなところ、物事に執着するところを捨て去ったまるで透き通った水の清らかなところのことです。私が申す念仏というものは、阿弥陀様が私を呼んで下さっている声であります。「大丈夫だよ、任せよ、必ず救う」と、その言葉に遇わせて頂いて「安心」、安らかな心を頂くことということこそがわたしは真宗のご利益ということだと思えます。まわりまわっているならば、この安心によって親鸞聖人の『現世利益和讃』も嘘を言っているわけではないのです。この心によって安らぎを得ることによって、七難消滅ということもいいましたが、直接的な理由ではないのですがまわりまわっているのちを大切にしたり、そういう心が起きてくるのです。そういう気持ちが出てきたならば、やがて安定してくる。そういった争いだらけの物事が、少しでも落ち着くことによって、例えば食べ物の自給率も上がってくる、物が作られてちゃんと流通してくる、ということが起きてきます。その中でいのちが長らえることも確かに起きてくる。息災延命や七難というものが消滅したり、直接的なことではないけれどもつながっていくということが、確かに考えられるわけです。だからまず南无

阿弥陀仏を称えてほしい、南无阿弥陀仏に遇ってもらいたい、直接的でないけれどもそういったことにつながっていくということを仰って下っているのです。そして、「南无阿弥陀仏こそが、私たちが本当に幸せになる道ですよ」ということを強く仰って下さっている和讃がこの『現世利益和讃』十五首と言っているのではないかと思います。

平成 22 年 7 月 20 日